

## 報告 渡邊輝男さんとセルフレスキューを語る集い

大阪ぼっぽ会 辻本 亨弥

2017年7月14日の〈渡邊輝男さんとセルフレスキューを語る集い〉事務局をさせていただきました辻本です。

2年ほど前から、『セルフレスキュー』（渡邊輝男さん著、ヤマケイテクニカルブック⑩山と渓谷社）を手にとることが、おおくなりました。それは、所属会の救助隊長になり、また、所属会のレスキュー訓練も担当するようになったからです。お恥ずかしい話ですが、それまで自らの意思でレスキューについてきっちり勉強したことがありませんでしたので、そのような任には全く力不足でした。そのような時、この本を再読しようと思いつきました。知りたいこと、解らないないことが、平明に書かれていました。出版されてもうだいぶたちますので、個々の技術や知識としては、古い記述もありますが、それでも、登山の安全について、体系的に、書かれた本として、今なお、頼りになる本と思いました。

昨年末、中川教遭部長と渡邊輝男さんが全国遭難対策の分野で親しい交流があると知り、中川さんに渡邊輝男さんの講演会開けないですか？と御願いしたところ、考えてみますとのご返事、この集いへと至りました。

辻本は、長い間、どうしたら事故が減るのだろうという漠然とした疑問を抱えていましたが、この本は、その冒頭で、下記のように書いています。

・・・「山登りは自己責任で」という大原則を守り、しっかりと自分でリスクマネジメントを・・・中略・・・山の自然は絶対に管理できるものではない。そのことを啓もうし、登山者ひとりひとりが自覚しない限り、残念ながら遭難事故はこれからも増え続けていくだろう。・・・

セルフレスキューはクライミングだけのものではありません。大阪府連のスタンプ講習会の重要な科目「ハイキングレスキュー」のもととなった取り組みを展開して来られた泉州労山から日高さんはじめ、多くの方がご参加下さり、活発な議論が盛り上がりました。

お手伝いくださった KONK 井上眞由美さん、テンション井上好司さん、アドバイスくださった OAR 大見則親さん泉州の木村治朗さん、ありがとうございました。井上眞由美さんには、当日のまとめを作ってくださいました。以下ご紹介いたします。



## 渡邊輝男さんとセルフレスキューを語る集いのまとめ

北大阪のぼろう会 KONK 井上眞由美

ヤマケイ『セルフレスキュー』著者の渡邊輝男さんが全国遭難対策会議で神戸に来られるとのことで、セルフレスキューについて語っていただき、また労山会員の疑問にお答えいただければと、会議前日の7月14日に労山事務所にお招きしました。24名の方々が参加され、充実した会となりました。

渡邊さんは1956年 新潟県生まれ、中学時代に登山を始め、大学の時に「わらじの仲間」に入会して沢登りとクライミング両面で活躍されています。またレスキュー技術の研究や普及活動にも熱心に取り組まれています。

渡邊さんは、はっきりとよく通る声でゆっくりわかりやすく丁寧にお話しして下さいました。特に印象に残った言葉は「レスキューは三つのSが大切だ」ということです。「シンプルなS、セイフティーのS、スピーディーのS」です。

- ・確実に端的にできるもの、単純なものをひとつひとつこなしていく。
- ・手数のかかるものは現場ではでない。余計なものは足さない。
- ・普段使っていること、きっちり確実にできるロープワークを使うこと。
- ・普段ロープワークをしていない人が年に数回ロープワークを学んでもいざという時に確実にできるかは疑問とのことです。

またリスクコントロール力をひとりひとりが身につけることが大切だということ。誰かが何

かをしてくれるというのは、自分で考えることにはならない。安全の備えを誰かがしてくれればしてくれるほどリスクコントロールの力が失われる。ひとりひとりが自分でリスクを把握する癖をつける。

読図においても距離感覚と方向感覚を身につける。読みが正確に当たっているか？ 目指す尾根に乗れたか？ うまくいけば満足感が得られ、間違っていると自分にはね返ってくる。

沢も危険がいっぱいです。高巻きで転落事故。増水で溺死。釜に引き込まれて溺死等。沢はクライミングと違って自分が落ちないルートを選んで進むことができる。沢のリードは絶対落ちないこと。沢もクライミングもスリップしたらどうなるのか、あらかじめわかる人間がいないと落ちてからの対応は難しい。

- ・事故者が意識のあるうちに対応する。
- ・二重遭難は絶対避けること。

お助け 4 点セットを常に持って山行している泉州労山の日高さんや、司会もして下さったクライミングに詳しいポップ会の辻本さんから自分の会の取り組みや質問が出て、渡邊さんが丁寧に答えてられました。

日高さんから、簡易ハーネスは利き腕でない方の肩にスリングをかけ、利き腕の方（制動をかける方）に脇の下からスリングが 2 本くるようにした方が荷重がかかった時にいいとの事。フリクションノット（バックマン）についても最近のカラビナの形状が軽量化のため断面が楕円、板状になっているものがありフリクションが効かず墜落の恐れがあるとの事なので、登攀中にはバックマンを使用せずオートブロックが有効とのことでした。

渡邊さんもオートブロックは自分の動きにあわせて動き効いてほしいときに効くので良い。クレイムハイストは信頼性がある。マッシュャー結びは現場でよく使うとのことでした。

実際に事故が起こった時の救助組織（警察・消防・遭難対策協議会・山岳会・家族）の連携についても要点を整理し、お話しくださいました。

ミニ宴会もにぎやかに楽しく時間の過ぎるのがあっという間でした。渡邊さんの周りでは人でいっぱい。皆さん熱心に渡邊さんと語られていました。もっともっと渡邊さんのお話を聞いていたかったです。

渡邊さん、遅い時間まで本当にありがとうございました。熱い思いが伝わってきました。

全国遭難対策委員長臼井さん、全国事務局長川嶋さん、大阪岳連石田さん、兵庫労山森浜さん、ご参加ありがとうございました。

渡邊さんに交通費のカンパをしてくださった参加者の皆さんの優しい気持ちに感謝申し上げます。